

二〇二〇年度

一般入試② 問題（国語）

注意書き

- ・試験開始の合図があるまで問題用紙を開いてはいけません。
- ・解答用紙二枚のみ集めます。問題冊子は持ち帰ってかまいません。
- ・この冊子には問題が一ページから二二ページまであります。万一、足りない部分があったり印刷が見にくかったりする場合は、手を挙げて試験監督に知らせること。
- ・解答はすべて解答用紙の枠わくの中に記入し、用紙には、関係のない文字・記号類を書いてはいけません。
- ・字数指定のある問いは、句読点なども字数にふくめること。
- ・解答用紙を集め終わっても、試験監督の指示があるまでは席を立たないこと。

一、次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

矢代大地〔俺〕は中学二年生。入学直後の実力テストで学年一位になったが、その後はどんなに頑張っても二位だった。悔しがる大地だが、とあるきっかけで、常にトップの生徒が教室では影のうすい百井裕樹であることを知ってショックを受ける。が、トップであることをひけらかすこともなく、常に謙虚な百井の人がらにふれ、大地は百井との関係を深めていく。そんなある日、一緒に県内トップの進学校へ進学するつもりでいた大地に、百井は中三になる四月に引越すことになったと告げる。

「とつくに気づいていると思うけど、僕ん家ってお金ないんだよね」

と、ゆっくり歩きながら、百井はぼつぼつとしゃべった。

「もともと父親は、運送会社で働いててさ。もうばりばりの肉体労働系。けど途中で腰を痛めちゃって、やめるしかなくなっちゃって」

「……そうなんだ」

「そこからが大変だった。うちの父親、高校中退で学歴も資格もないから、なかなか次の仕事が見つからない。やっと決まった会社も労働条件悪くて、しょうがなく母親もパートに出るようになったんだけど、そのうち言い争いとかも増えてきて」

百井は、乾いて血のにじんだくちびるをなめると、さらにつづけた。

「結局、小三の時に離婚した。そこから母親とふたりで別の町に移り住んで、団地に住んでたけど、小六の終わりにそこ建て替えが決まって、中学からはこの町に越してきたってわけ。ま、今のアパートも前と同じくらいひどいけど」

「……それで」

「やっと落ち着いたと思ったら、今度は母親が、再婚したい相手がいるってさ。別にそれを止めようなんて思わないけど、僕だって、今さら他人と住むなんて嫌だよ。親の事情でふり回されるのも、言いなりになるのも。だから頼んだんだ、自分から。再婚するなら、僕を、じいちゃん家に行かせてほしい、って」

「……………」

「ふつうさあ、子どものほうを取ると思うじゃん？ でもそうじゃなかったんだよね、うちは」

そこでいったん言葉を区切ると、百井はめずらしく、おどけた表情を俺に向けた。

「……ひよつとして、同情した？」

「しねーよ、バカ。うぬぼれんな」

内心ぎくりとしたけれど、わざと突き放すような口調で俺は言った。百井は俺から目をそらし、「うん。ありがとう」とつぶやいた。だから俺は平然を装って、「つうか、お前、よくグレないよなあ。えらいじゃん」と茶化してみせた。

「だよねえ。自分でもそう思うよ」

百井はしみじみと言って、うなずいた。

「けど、ちっちゃい時は、かなりひねくれてたんだよ。勉強だって大嫌いだったし」

「うっそ、マジで？ 想像つかねー」

「マジマジ。勉強するようになったのって、小三の時からだもん」

俺の口真似をしてうなずくと、百井は、何かを思い出すみたいにふっと目を細めた。

「……ていうか、小三の時の担任が、変な人でさ」

「担任？」

「そう。僕が転校することになった時、その先生、言ったんだよね。『百井、お前、勉強だけはしっかりしろよ』って」

「なんか、ありきたりな台詞だな」

「うん、そう思うよね。僕も正直、うざいなって思った。けどその後先生、こう言ったんだ。『なんだかんだ言っても、日本は学歴社会だ。でもな百井、それってすごいラッキーじゃないか？ 勉強するのはだれにでも与えられた、一発逆転のチャンスなんだからさ』って、すごい真剣な顔で」

ぼかんとする俺の顔を見て、百井はかすかにほっぺをゆるめた。

²「変な先生だよ。先生っぽくないっていうか。でも、僕としては、目からうろこだったんだ。すごくびっくりした。それから、自分なんかにも逆転のチャンスがあるのかーって」

それを聞いたとたん、俺は、いつかの百井の言葉を、ようやくちゃんと理解できたような気がした。——勉強³って、みんな平等だろ？ それって、すごいことじゃなか。

「そつから僕、勉強、頑張るようになったんだ。もともと賢^{かしこ}いわけじゃないから、努力でなんとかしなきゃって必死だった。そのぶん、他の子たちみたいに遊んだりできなかったけど」

「……だから、ドッジもあんなにヘタクソだったのか」

力なく冗談^{じょうだん}めかしてそう言った俺に、けれど百井は、「そうだね、うん。きっとそう」と笑って、暗くなった空を見上げた。

「僕、将来、学校の先生になりたいんだよね。それで、自分の足で生きる方法を、子どもに教えられるようになりたい。現実から逃げずに、うまく乗り切れるように」

それはただの夢物語ではなくて、誓^{ちか}いののように、俺には聞こえた。そうか、としか答えることができなかった。それ以外に、俺に、なんて言えただろう？

「ヘビーな話でごめん。けど、そういう事情だから仕方ないんだ。僕が、自分で決めたことでもあるんだし。今さら後には引けないし」

なんにも悪くないくせに、申し訳なさそうに眉^{まゆ}を下げる百井に、俺はいたたまれなくなった。だからあえて、「でも百井、入学して最初の実力テストは、お前、俺より順位下だったじゃん」と話をそらして、おどけてみせた。

百井は一瞬^{いっしゅん}きよとんととして、それから、ああ、と手を打った。

「あれね。僕、休んでたから。新学期早々、インフルエンザで」

「……マジで？」

「うん。だからそれは、矢代くんの不戦勝」

がくつとうなだれる俺を見て、百井は愉快^{ゆかい}そうに天へ向かって息を飛ばす。

その大人びた横顔が、少しだけ、にくらしかつた。

だって、俺ははつきり落胆^{らくたん}してたから。ライバルだって、友達だって思ってたヤツが、春にはどっか遠くへ行ってしまう

こと。そして、百井がその未来を割り切って、ちっともめそめそしてないことに。⁵ 遠いな、と思った。

俺より何十歩も何百歩も先の場所に、百井はいるんだ。きっと、ずっと前から。

それから終業式までの日を、俺も百井も、今までとまったく同じように過ごした。

朝会えば、「おはよー」「うっす」と定番のあいさつを交^かわす。

休み時間には、他愛^{たわい}もない話題で、笑い合う。

放課後になると、百井はまっすぐ帰るか図書室に向かい、俺はいつもどおり部活に行った。そして、「だりー」「眠^ねみー」とたけるたちと言い合って、真っ暗な通学路を自転車^{たん}車で走った。

何も変わらない、淡々^{たんたん}とした日常。

くり返される昨日が、まんま今日で、そっくり明日だった。⁶ それでも、これでいいんだと、俺は部屋の日めくりカレンダーをちぎるごとに、自分にそう言い聞かせた。

——だって俺、センチメンタルに別れを惜^{おし}むキャラでもないし。ていうか、別に死に別れてわけでもないし。

それに百井だって、すっきり送り出してもらったほうが、よっぽど気分がいいだろう。分かってる。だけど同時に、これでもいいのか、というもどかしさが心の片すみにくすぶっているのもまた、嘘^{うそ}じゃなかった。

どうしてなのか、自分でも、よく分からなかった。

ひとり大人になつてく、百井へのやつかみ？

置いてかれることへのあせり？

それもある……かもしれないけど、それだけじゃない。それだけじゃないんだ。なぜなのかは、いくら考えても、つかめないままだったけど。

そうこうしているうちに、三学期最後の日がやってきた。

つい一週間くらい前までは身が切れそうなほど寒かった気がするのに、今日は制服の背中が、うっすら汗ばむほどの陽気だ。

「なーんかさー、ザワ先のヤツ、わりとあっさりしてたよなあ。お別れ会とか、百井への叱咤激励とか、なんかしらあるかと思っただのになにせ、体育会系だし」

カラカラと自転車を押しながら、俺はぼやいた。百井が隣で苦笑いする。

「それは、僕が頼んだんだよ、先生に。お別れ会とかあいさつとか、そういうのは仰々しくて恥ずかしいからやめてください、って。かなりしぶられたけど」

「そういうところ、やっぱひかえめだよなー、百井って」

「うん。謙虚だからね、僕は」

「いやいや、謙虚って自分で言ったら、謙虚じゃねえよ」

代わり映えのしない道のりを歩きながら、俺たちは心なしかいつもより饒舌で、そして、陽気だった。沈黙をうめようとするみたいに、俺も百井もつまらない冗談を言っつて、べつだんおもしろくもなんともないのに、声を立てて大げさに笑った。けれどいくら名残惜しんだところで、通学路は、いつもの長さのままだ。十五分も歩けば、簡単に、別れ道についてしま

う。

「矢代くん。じゃあ、僕、こっちだから」

踏切を越して、しばらく歩いた先の交差点に差しかった時、百井が言った。

「……あ、そっか」

気の抜けたような返事をして、俺はこの日、初めてちゃんと正面から、百井を見た。裾が短くなりすぎて、くるぶしまで見えているズボン。相変わらずのぼさぼさ頭……そういう百井のいでたちを見下してた日々が、急に、昔のこのように思えた。

何か言わなくちゃ、と俺は思う。

これで最後なんだから。感動的な、かっこつけられるような何かを――、

「ま、元気でやれよ」

結局、俺が選んだのは、そんなありきたりな一言だった。

「うん。矢代くんもね」

と、百井は、きまじめな顔でうなずいた。

そうしてお互い、「じゃあな」って手をふり合って、背中を向ける。

拍子抜けするぐらい、あっさりとした別れぎわだった。

しばらくチャリを押しながら歩いてみて、百井の足音も聞こえなくなったところ、俺はふう、とため息をついた。深呼吸してふり向くと、アスファルトの道の上に、百井の姿は、もうなかった。

ペダルに足をかけながら、俺はぼんやりと、頭の端で考える。

春休みが終わって学校に行っても、もう百井はいないんだ。

そう理解はしていても、なぜだか実感がわかなかった。というか、実際三年生になってみても、卒業するころになっても、ずっとぴんときないような気さえする。そうして永久にぴんときないまま、俺は百井のことを、次第に忘れていくんだろう。

9 ———— まあ、そんなもんだよな。結局は。

妙に冷静な気持ちで、そう思った時だった。

どこからか甲高い笑い声が響いてきて、俺はびくっと肩を跳ねさせた。と、顔を上げたとき、顔を上げたとき、ランドセルを背負った小学生たちが、すれちがいがずに、俺のわきを全速力で駆けていった。どうやら、近所の小学校も、今日が終業式だったらしい。

「ちょっと待ってよ、置いてかないでよ」

と、いちばん背の低いメガネの男の子が叫ぶと、「パーカ、お前がトロいんだって！」「早く来いよ！」と仲間らしいふたりが叫び返す。メガネの子は、どうしてなかなか負けん気が強いらしく、「うるさい！」と言いつつ返して、すぐさまふたりの

後を追いかけていった。

竜巻たつまきのような三人組の背中が、みるみる遠ざかっていくのを眺めながら、俺はふと、自分がガキだったころのことを思い出した。

毎日あちこち走り回って、わけもなく大声で叫んでみたりして。友達とどつき合って、ゲラゲラ笑って。思い返してみても、バカみたいだ。でも、あのバカみたいな一瞬一瞬が必死で、ただ、一生懸命いっしょうけんめいだったこと。

楽しかったな――。

そう思った瞬間、俺は、はっと息をのんだ。わだかまっていたもどかしさの理由が、急にすとんと、胸に落ちた気がしたからだだった。

――ああ、そうか。俺が百井にいちばん言いたかったのは……、
気づいたらもう、じっとしてはいられなかった。

チャリを方向転換てんかんさせ、勢いをつけてペダルを踏み込む。どうか百井を見つけれられますようにと、心の内で念じながら。

全力で走った。

そりやもうめちやくちやに、本気の本気で、チャリを飛ばした。

だから道の先に、ひよろつとした百井の背中を見つけた時、俺はどっと安堵あんどしたんだ。

「もーもいー！」

俺が叫ぶと、百井が弾はじかれたようにふり返った。びっくりしたようにどんぐりまなこを見開いて立ち止まった百井の前に、俺は急ブレーキで停車する。

「どうしたの、矢代くん」

ぜえぜえと息を切らしてハンドルに額を預ける俺をのぞきこんで、げげんそうに百井が問いかけてくる。何度か深呼吸して息を整えると、俺はまぶたの汗をぐいっとぬぐって、まっすぐに百井を見た。

「……今からさ、遊ばねえ？」

ひとりでに、言葉が口をついて出る。「え？」と百井はなおもげげんそうにまばたきをしたけれど、構わず俺は、一気につづけた。

「ガキみたく、全力でさ。走ったり、叫んだり。そういう、バカみたいな遊び。……だってさ、俺、お前とちゃんと遊んだこといっぺんもないじゃんか。最後くらい、勉強じゃなくて、くだらねえこと一緒にしようぜ。だって俺ら、まだ中学生じゃんか」

懸命に言い連ねながら、¹³なんてめちやくちやな言い分だ、と自分であきれた。

でも、まぎれもない本心だった。

百井はきつとこの先も、急いで大人になろうとするんだろう。それは、悪いことじゃない。だけど、覚えていてほしかった。本当に大人になった時、ああ楽しかったな、って、今日のことを思い出してほしかった。

肩で息をする俺を、百井が、ぼかんとした顔で眺めている。

それを見て、俺は急に心細くなってきた。こんなの、ひとりよがりじゃないか、百井はこんなことこれっぽっちも望んでないんじゃないか。そんな不安が、今さらのように押し寄せてくる。¹⁴恥ずかしさが胸をよぎって、俺は、とうとうつむきかけた。

けれど、その時だった。

「……うん！」

うれしそうな百井の声がすぐそばで弾けて、俺ははっと顔を上げた。

おずおずと、前を見る。

百井はきらきらと目を輝かがやかせて、笑っていた。

まるで、とっておきのいたずらを持ちかけられたみたいに。わくわくしてたまらない、今すぐにでも走り出したいって気持ちが見える。

¹⁵それは、まぎれもない、子どもの百井の顔だった。

問一 —— 線部1「うん。ありがとう」とあるが、百井はなぜそう言うのか。その理由として適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 同情されたくない自分の気持ちを「俺」が感じ取った上で、わざと突き放すような言葉を放つてこの暗い話を終わらせようとしてくれたと思いい、ありがたかったから。

イ 本当は同情してほしい自分の気持ちに「俺」が気づいてくれていて、突き放すような言葉の中に甘えずに頑張れという激励の気持ちが感じられ、ありがたかったから。

ウ 同情されることを求めている自分の気持ちを「俺」がくみ取った上で、あえて突き放すような言葉を返してきたことが理解でき、ありがたかったから。

エ 本当は同情を求めている自分の気持ちを「俺」が読み取ってくれていて、一見突き放すような言葉の中にも同情の気持ちが感じられ、ありがたかったから。

問二 —— 線部2「変な先生だね。先生っぽくないっていうか」とあるが、どういうところが「変」で「先生っぽくない」のか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 転校していく生徒には通常はなむけの言葉をおくるものなのに、この先生はわざわざ「勉強だけはしっかりしろよ」と忠告めたことを口にしてるところ。

イ 転校していく百井をいかにも勉強ができない生徒としてあつかい、お前には「一発逆転」をねらうしかないと本人に向かってその現状をつきつけているところ。

ウ 学校の先生としては、堅実で手堅い人生を送るように生徒を導くはずなのに、「一発逆転」などという手っ取り早く成功を取める方法をすすめているところ。

エ 学校の先生なら、人間を学歴だけで評価するような考え方を批判するのがふつうなのに、それを生徒に向かって大真面目に「ラッキー」だと肯定しているところ。

問三 —— 線部3「勉強って、みんな平等だろ？ それって、すごいことじゃなか」とあるが、どういうことを言っているのか。百井の家庭環境から考えてここで言う「平等」とはどういうことを明らかにしながら、それがどういう点で「すごいこと」なのかを、六〇字以上、八〇字以内で答えなさい。

問四 —— 線部4「自分の足で生きる方法を、子どもに教えられるようになりたい」とあるが、百井はどのような思いからこのように言っているのか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 百井自身が小学校の担任から教わったように、学歴社会である日本で生きていくためには勉強が大切であることを子どもたちに教えたいという思い。

イ 百井自身が親の事情に左右されたり、親の言いなりになったりせず自身力で生きていこうと考えていて、子どもたちもそう導きたいという思い。

ウ 自分と同じ貧しい家に生まれた子どもたちでも、引け目を感じることなく学校生活を送れるように、誰にも平等な学校教育を実現したいという思い。

エ 自分のように転校や友達との別れといったつらい出来事にあっても、それに負けずに強く生きていけるような子どもたちを育てたいという思い。

問五 —— 線部5「遠いな、と思った」とあるが、このとき「俺」は百井のことをどう感じているか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の得意・不得意を早々に見きわめ、不得意なことに時間をかけるより得意分野の勉強で未来を切り開こうと一心に努力する百井を、自分よりかなり大人だと感じている。

イ 早くから勉強は不利な環境を打開するための手段になると考え、長期的な視野をもって勉強を続けて一回一回の試験の結果に一喜一憂いっきいっゆうしない百井を、自分より大人だと感じている。

ウ めぐまれない今の環境では達成できることも限られていると早くから自分の将来に見切りをつけ、人生に多くを期待していない百井を、自分よりかえって大人だと感じている。

エ 自分の今いる環境をうらんんだり悲しんだりせず、その環境の中でいだける夢を早くから見つけてそのために迷わず努力している百井を、自分よりはるかに大人だと感じている。

問六 —— 線部6「それでも、これでいいんだと（ ）自分にそう言い聞かせた」とあるが、このように自分に言い聞かせているのはなぜか。その理由として適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 百井の様子から最後までいつも通りに接した方が良いとは思うもの、お互いの心に残るような送り出し方が他にあってではないかという思いが日ごとにわき上がってくるのをどうすることもできずにいるから。

イ 百井が喜ぶのは大げさな送り出し方ではなく、淡々とした送り出し方だろうと思って実行してはいるものの、日がたつごとに本当に百井が喜んでくれているのか少しずつ自信がなくなってきたら。

ウ 親友がいなくなるので本当はセンチメンタルな気分にはたつて別れを惜しみたいと思っではいるものの、日がたつて何事にも冷静な百井に拒絶きょつたつされる気がして余計に言い出しにくくなってしまっているから。

エ 特別なことをしないまま親友の百井と別れてはいけないと思っではいるものの、自分たちにふさわしい気のきいた送り出し方がなかなか思いつかず、ただ時間ばかりが過ぎてしまいあきらめかけているから。

問七 —— 線部7「俺たちは心なしかいつもより饒舌で、そして、陽気だった」とあるが、なぜか。その理由として適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア もうすぐ最後の別れだが、いつもよりもぎやかにすることで、相手は友達の一人にすぎず、いなくなっても平気だと互いに無理に装っているから。

イ もう会わなくなると分かった上で、いつも以上に明るく調子を合わせることで、つい泣きそうになる気持ちを互いに何とかおさえようとしているから。

ウ 別れの時が近づいたと感じながら、いつもよりもはしゃぐことで、ふだん通りの雰囲気ふだん通りのふいぎを壊さないようにしようと互いに少し無理をしているから。

エ 一緒に帰るのも最後だが、いつも以上に盛り上がることで、別れぎわに何を言おうかと高まってきた緊張きんちやうをゆるめようと互いに思っているから。

問八 —— 線部8「俺はふう、とため息をついた」とあるが、ここには「俺」のどのような気持ちが表れているか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の思いを完全には伝えきれなかったという後悔こうかいは残るものの、いかにも別れにふさわしい感動的であった言葉は口にせずにすんだことには満足している。

イ 自分の気持ちをうまく伝えられなかった心残りはあるものの、二人の最後にふさわしい言葉を言わなければならないという重圧からは解放されて少しほっとしている。

ウ 無理せず自分の実感に見合った言葉で別れることができたことは誇らしく思うものの、ありきたりな言葉しか出てこなかった点については少し落ち込んでいる。

エ 最後は特に感情的になることもなくあっさり別れてしまったものの、別れた後急に百井を失ってからのことが思いやられて言いようもないさみしさにおそわれている。

問九 ― 線部9「まあ、そんなもんだよな。結局は」とあるが、ここには「俺」のどのような気持ちが表示されているか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 百井がいなくなった実感がわかないまま、今後も悲しむことなく、百井のことを自然に忘れてしまえるはずだと自分に言い聞かせている。

イ 百井がいなくなったことがぴんとこなくて、百井をそのまま忘れてしまいそうな自分の冷たさにおどろきながらも、そんな自分を受け止めようとしている。

ウ 百井がいなくなった痛みを感じられないことに拍子抜けしながらも、百井が自分にとってそれほど大きな存在ではなかったことを納得なっとくしようとしている。

エ 百井がいなくなった喪失感そうしつを感じられないまま、百井の印象も段々とうすれていってしまうことを仕方がないことだと受け入れようとしている。

問十 ― 線部10「急にすんと、胸に落ちた気がした」とあるが、この表現はどのようなことを言っているのか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 突然とつぜん押さえきれない思いで胸がいっぱいになった。

イ 不意にはつきりと納得のいく形で理解できた。

ウ ふとどうでもいいことに思えてわだかまりが消えた。

エ 簡単には消えない形で胸にきざみ込まれた。

問十一 ― 線部11「俺が百井にいちばん言いたかったのは……」とあるが、この時「俺」は、どのような思いから、どのようなことを百井に「言いたかった」と考えられるか。解答らんの文末に合うように、八〇字以上、一〇〇字以内で答えなさい。ただし、解答には次の二語を必ず用いること。

大人・子ども

問十二 ― 線部12「俺はまぶたの汗をぐいっとぬぐって、まっすぐに百井を見た」とあるが、この時の「俺」のどのような様子を言ったものか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 百井に本気で伝えたいと思っっていることがあるので、それを余計なことを考えず一心にぶつけようとしている。

イ 百井に追いついて最後に話す機会ができたので、今度こそきちんと伝えるために冷静になろうとしている。

ウ ようやく自分のわだかまりを言葉にできたので、百井の反対を押し切れるように真剣に話そうとしている。

エ 大人びている百井に幼稚ようちな提案をするのは少しためらわれるので、勇気をふりしぼって伝えようとしている。

問十三 ― 線部13「なんてめちゃくちゃ言い分だ」とあるが、どういう点が「めちゃくちゃ」なのか。次の中から適当なもの一つを選び、記号で答えなさい。

ア 「バカみたいな遊び」をやるうとさそっておきながら、それを中学生にもなって「全力で」やるうと言っている点。

イ 「勉強」だけのつき合いで別れが近づいても淡々と過ごしていたのに、最後に急に「遊ばねえ?」と言っている点。

ウ 「遊ぶ」というのは自分のやりたいことをやりたいようにやるものなのに、それを「ちゃんと」と言っている点。

エ 「最後」なのだから本当は内容や価値のあることこそすべきなのに、「くだらないこと」をしようと言っている点。

問五 —— 線部14「恥ずかしさが胸をよぎって」とあるが、なぜそのような気持ちになったのか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア ほんの少し前にあっさり別れておきながら、今度は息を切らし必死に追いかけてきて、汗だくのまま一方的にしゃべる自分を、百井がぼかんと見ていたから。

イ もともと勉強を通してのまじめなつき合いであり、百井もだからこそ自分と友達になったのに、実は遊びたかったのだということを知られてしまったから。

ウ いつまでも忘れてほしくないと思っているのは自分だけで、むしろ百井の方は最後まで淡々としていて、特別な感情はわいていないのかもしれないと思ったから。

エ 最後にただただ二人の楽しい思い出をつくって別れたいという思いは、自分一人だけのもので、百井はまったくそれを望んでいないのではないかと思ったから。

問五 —— 線部15「まぎれもない、子どもの百井の顔だった」とあるが、百井のどのような心情が表れたものか。その説明として適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 本当は全力で遊んでみたいと思いがら言い出せずにいたが、その気持ちに「俺」が気づいてくれたことに感動し、子どものような喜びが表情に表れた。

イ 最後まで一緒にガキみたいに遊ぼうと言われ、「俺」と一緒に遊んだ小学校時代のことを思い出し、なつかしさに自然と子どものころの表情になった。

ウ 最後まで一緒にバカみたいな遊びをしようという「俺」の提案がうれしくて、これからやろうとすることへの子どもらしい期待が顔中にあふれている。

エ この日まで背伸びして大人っぽくふるまっていたが、「俺」がわざわざ追いかけて来てくれたことがうれしくて、思わず子どもらしい素顔が顔を出した。

二、次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

ある人が書いた文章を、別の誰かが読む。(中略)異なる体の記憶が、別の、しかも条件の異なる体と出会う。この接触は、違和感を生み出すこともあれば、逆に体を変えるような学びの機会になることもあります。そうした「自分のものではない記憶との出会い」について、考えてみたいと思います。

中瀬恵里さんは、全盲の読書家です。先天的に全盲ですから、そもそも「見る」ということがどういふことを経験的に知りません。それゆえ、目が見える人の文章を読んだときに、小さな違和感を感じることがあります。

たとえば小説で、レストランの店内の様子が描写されていたとします。「店の扉をあけると、カウンターのほかにテーブル席が五つあった」。たとえばこんな何気ない描写であったとしても、中瀬さんにとっては、違和感を感じると言えます。それはどんな違和感か。「細かい」と中瀬さんは言います。「本を読むとすごく情報が細かい。ふだん知らないようなことも書いてあって、『へー、テーブルが五つ』みたいな(笑)。行きつけのお店でも数えたことないような情報が入ってくるから、細かいな、と思います」。

「細かい」という反応は、中瀬さんが実際にレストランに行くときの経験の記憶と、本で描写されている情報を比較することから生じています。中瀬さんは、行きつけのお店であってさえ、わざわざ席の数を確認したことはない。ゆえに思い出すとしても思い出すことができない。それは意識していない、記憶していない情報です。

ところが、目が見える人が書いた文章には、平然と席の数が「五つ」と明示してある。自分が意識・記憶していない情報が描いてあるがゆえに、中瀬さんはそれを「細かい」と感じているのです。

注意しなければならないのは、この差異が、単純な情報の「量」には還元できないということです。

確かに目が見える人の記述は、中瀬さんが意識・記憶していない情報も含まれているという意味で、情報量が多いように思えます。しかし「テーブルが五つ」という情報によって、目が見える人が何を伝えようとしているかを考えれば、そこに「質」の問題も関わっていることが分かります。

目が見える人がレストランの席数を記述するとき、多くの場合それは「レストランの規模」を読者に伝えることが目的で

しよう。もちろん、スイリ小説などでは「5」という数そのものが重要になる場合もありますが、たいていは数は手がかりにすぎません。

「五席」であればかなり小さな、こじんまりしたレストランでしょうし、「一〇〇席」となればファミレスのような、店員さんが端末を持って注文を取りに来るような機械化された店をイメージします。席数という情報を手がかりに、目が見える人は、店舗の空間的な広さやタイプ、料理の価格帯、想定されるコミュニケーションなどについてのイメージをふくらませます。

では全盲の方がレストランに行くとき、彼らはこうした「店の規模」に関する情報を得ていないかというところ、必ずしもそういうわけではないでしょう。お客さんの会話のトーン、BGMや環境音が反響する具合、あるいは頬にあたる空気の流れを手がかりに、彼らは瞬時に「規模」を把握しているはずですよ。

中瀬さんも言います。「たとえば初めてのレストランに行ったとしますよね。そうすると、広そうなレストランなのか、こじんまりしたレストランなのかは、なんとなく雰囲気でも分かります」。ただ、それを「席数」という数では表現しないうです。

加えて、見える人が席数を描写するのは、レストランに入ったときに、「自分（たち）の席を選ぶ」意識があることも関係しているでしょう。店のなかで、どこに空席があり、どこが人数にふさわしく、かつどこが最も居心地がよさそうか。つまり目の見える人の多くが、レストランに入った瞬間、「テーブル」に意識を奪われているのです。

だからこそ「席数」の描写があっても不自然には感じない。これに対し、目の見えない人は、特に初めて入るレストランでは、自分で席を決めるのではなく、介助者や店員に案内されて席につく、という形になります。つまり、「テーブルの状況を把握しなくちゃ」という習慣がない。こうした意識の違いも、描写の違いのイチインであると考えられます。

このように、目の見えない人と見える人では経験のパターンが違っており、だからこそ、「自然だ」と感じる描写のパターンも違ってくる。そのギャップが「細かい」というような量的な多少として感じられたとしても、その背後にあるのは、経験の質的な差異です。

実際、中瀬さんは、見える人が行う描写について「落ちていいる」と感じる情報もあると言います。中瀬さんの経験の記憶からすれば「あつて当然」の情報が、書き込まれていないのです。

中瀬さんは言います。「本の描写では、椅子が何脚で机が何脚で、ということは書いてあるんですが、材質や座り心地はあんまり書いていない。テーブルも、四角いか丸いかはあんまり書いてない。触覚とか匂いとか、そういうものは見える人の書く本からは落ちていいる気がします」。

近代イコウの文学において、描写とは基本的には「視覚的な描写」を意味します。絵画のように、あるいは演劇のように、場面や人の行為を、読者の目の前にありありと見せること。これが描写の役割とされてきました。それゆえ、触覚や嗅覚の情報は、相対的に「落ちやすい」。もちろん、「ハナをつく匂いが漂ってきた」のように、描かれることもあるでしょう。しかしそれはあくまで視覚的な描写に対してはホソク的な位置にとどまります。

一方、中瀬さんの場合は違う。とらえるのは、触覚や嗅覚の情報によって構成される世界です。「自分の場合は、ベンチに座つたら、お尻がくぼんでいいるとか、ずいぶん柔らかいとか、どういう座り心地なのかは意識する、というか勝手に入ってきちゃうんです」。

ちよつと極端な言い方をすれば、言葉の定義そのものが違つていいる、とでも言えはいいでしょうか。「椅子」と言われたときにイメージするものが、見える人と見えない人では違つていいるのです。「あの行きつけのレストランの椅子」と言われたら、見える人であれば、椅子の色や形、素材を思い出すでしょう。

しかし中瀬さんは違います。「椅子の背がカクカクしていたかとか、椅子を引いたときの重さとか、思い出しますね」。「あとは手触り。木つて言つてもトゲが刺さりそうなやつなのか、山小屋みたいな「丸太の」凸凹のやつなのか、ニスっぽいきれいなやつなのか、そういったことは手触りで覚えていいますね」。

このような触覚的な記憶についての話を聞くと、「そもそも記憶とはどこにあるのか」という哲学的・脳科学的な大問題におちあたります。

視覚的な記憶を思い出す場合、少なくとも私たちの実感としては、「頭に思い浮かべる」のであつて「目で思い出している」わけではない。一方、触覚は全身に広がつており、「どこで感じたのか」（手のひらなのか、背中なのか、足裏なのか）という位置の情報も、そこには含まれていいます。となると、記憶に関しても、位置の情報が何らかの形で再生されるのではないか。

中瀬さんも言います。「椅子の触感とかは、座ったときの感覚がよみがえる感じですね」。それはまるで、「背中で思い出している」ような記憶のあり方です。(中略)

このように読書は、ときとして、書き手と読み手のあいだの体の違いを、明瞭めいりょうにあぶりだす機会になります。それは小さな違和感を生み出しますが、中瀬さんにとってこの違和感は、「自分に合っていない」という嫌悪けんおにつながるというよりは、見える人の世界と自分の世界の違いを発見し、探求するきっかけになっています。(中略)

感覚は純粋じゅんすいに生理的なものではありません。文字を含め、人類が生み出した技術は、人間の生理的な能力を拡張するためにあると言われます。本を読めば、自分が経験したことのないことを擬似的ぎじてきに経験することができ、その知識はその人の感じ方、世界の捉え方を変えます。障害と読書というと、「情報保障」のような福祉ふくし的な視点7が中心になりがちですが、「異なる体の出会い」としてそれを捉えてみることも、多くの発見をもたらしてくれます。

(伊藤亜紗『記憶する体』)

問一 —— 線部 a s e のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 —— 線部 1 「目が見える人の文章を読んだときに、小さな違和感を感じることがある」とあるが、中瀬さんは「目に見える人の文章」をどう感じると言っているか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 目が見えない自分がふだんの生活の中でさほど重要と思っていない、ゆえに書かれていても退屈たいくつを感じるだけのテーブル席の数についての情報が細かく記述されていると感じる。

イ 目が見えない自分がふだんの生活の中で特に関心をもたない、ゆえにさほど意味があるとも思えないテーブル席の数などに関する情報がこと細かく記述されていると感じる。

ウ 目が見えない自分がふだんの生活の中で意識していない、ゆえにいくら説明されても理解できないテーブル席の細かな様子などについて延々と記述されていると感じる。

エ 目が見えない自分がふだんの生活の中で経験することのない、ゆえにその目的も分からない席を数えるという行為について細かく記述されていると感じる。

問三 —— 線部 2 「そこに『質』の問題も関わっている」とあるが、たとえば「テーブルが五つ」という描写は、目の見えない人と見える人にとって、それぞれどのような「質」の情報になっていると筆者は言っているか。次の中から適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 目が見えない人にとって「テーブルが五つ」という描写は単にテーブルの数を伝えるに過ぎない情報になっているが、見える人にとってその描写はテーブルの数だけでなく、テーブルが存在する場所全体の雰囲気までも広く伝えうる情報になっている。

イ 目が見えない人にとって「テーブルが五つ」という描写はその場にあるテーブルの数だけを伝える情報になっているが、見える人にとってその描写はテーブルの数だけでなく、そのテーブルがどのような見た目かまで広く伝えうる情報になっている。

ウ 目が見えない人にとって「テーブルが五つ」という描写は店内にテーブルがいかに多いかを伝える情報になっているが、見える人にとってその描写はテーブルの多さだけでなく、それが空間全体の中でどう配置されているかまで広く伝えうる情報になっている。

エ 目が見えない人にとって「テーブルが五つ」という描写は店内にテーブルがいかに少ないかを伝える情報になっているが、見える人にとってその描写はテーブルの少なさだけでなく、テーブルの居心地のよさまで広く伝えうる情報になっている。

問四 —— 線部 3 「『レストランの規模』を読者に伝える」とあるが、目の見えない人に「レストランの規模」を伝えるには、どのような情報が書かれていることが望ましいか。そのことについて具体的に書かれている一文を探し、初めの五字をぬき出しなさい。

問五 —— 線部 4 「その背後にあるのは、経験の質的な差異です」とあるが、どういうことか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「自然だ」と感じるレストランの描写が目が見えない人と見える人とで違うのは、レストランに入った瞬間に無意識に把握する情報の違いのせいであるということ。

イ 不自然に感じないレストランの描写が目が見えない人と見える人とで違うのは、レストランで食事をするときにどう楽しむかという楽しみ方の違いのせいであるということ。

ウ 違和感がないと感じるレストランの描写が目が見えない人と見える人とで違うのは、レストランに行ったときに意識するものごとの違いのせいであるということ。

エ 臨場感を感じるレストランの描写が目が見えない人と見える人とで違うのは、レストランに入って食事をする際に意識し、記憶している情報の違いのせいであるということ。

問六 —— 線部 5 「見える人が行う描写について『落ちている』と感じる」とあるが、中瀬さんがこのように感じるのはなぜか。その理由として適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 目に見える人は、その空間の広さや視覚的な美しさ、物の数ばかりを描写し、大切な居心地のよさには触れないから。

イ 目に見える人が行う描写は、視覚的な描写が中心で、目が見えない人にも理解できるような配慮に欠けているから。

ウ 目に見える人の触覚や嗅覚による描写は、目が見えない人の通常感している世界に比べてうまく描けていないから。

エ 目に見える人の描写は視覚的で、目が見えない人が通常意識している触覚や嗅覚による情報が描かれていないから。

問七 —— 線部 6 「言葉の定義そのものが違っている」とあるが、どういうことか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア ある言葉に触れたとき、五感で感じたものをどれくらいはっきりイメージできるか、目に見える人と見えない人では違っているということ。

イ ある言葉に触れたとき、五感のどこでどのように感じ取ったものを思い起こすか、目に見える人と見えない人では違っているということ。

ウ ある言葉に触れたとき、その言葉の意味を他人に対してどのように説明するか、目に見える人と見えない人では違っているということ。

エ ある言葉に触れたとき、その言葉が指し示している対象は何か、目に見える人と見えない人では違っているということ。

問八 —— 線部 7 「異なる体の出会い」としてそれを捉えてみることも、多くの発見をもたらしてくれます」とあるが、これは、たとえば「目に見える人」と「目が見えない人」とが、読書を通してどのような体験をするをいうのか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 本を読むことで、目が見えない人が目に見える人の書いた視覚的な描写に接し、自分たちが通常は意識したり記憶したりしていない視覚的な情報によって、目が見える人と同じようにこの世界を捉えることができるようになる。

イ 目に見える人は、目が見えない人の日常がどんなものかを書いた本を読むことで彼らの世界を知り、目が見えない人もまた、目に見える人が書いた本を読むことで彼らが通常どのように世界を捉えているかを知ることができる。

ウ 読書を通じて、目が見えない人は通常意識しない視覚的な情報を通してこの世界に触れ、目に見える人は目が見えない人の感じる違和感を通して自分たちの視覚に片寄った描写に気づくことで、お互いに世界の捉え方が変わる。

エ 目が見えない人が読書を通じて感じる違和感を知ること、目に見える人たちが、自分たちが視覚に頼るあまりにものを見た目だけで捉え、触覚、嗅覚なども用いてものの本質的な部分を捉えていなかったことに気づかされる。

二〇二〇年度 一般入試② 国語解答用紙(2)

受験番号

氏名

	I
	II
	III
	IV
	V
	VI

小計

◆右のらんには何も書かないこと。

問 士					
と言いたかった。					
100	80				

問 士	問 士
問 三	問 三
問 四	問 四

問 一	
d	a
e	b
	c

問 八	問 五	問 二
問 六	問 三	問 七
問 七	問 四	問 四

二〇二〇年度 一般入試② 国語解答用紙(1)

受験番号

氏名

	I
	II
	III
	IV
	V
	VI

解答用紙2

合計

◆右のらんには何も書かないこと。

問一
ウ

問二
エ

問三			
が	、	し	勉
あ	き	て	強
る	れ	い	ほ
と	に	て	、
い	よ	も	お
う	ろ	関	金
点	て	係	か
で	誰	は	は
す	に	く	い
こ	で	甲	家
い	も	等	に
と	一	に	生
い	発	で	ま
う	達	ま	れ
こ	転	る	て
と	の	も	ち
。	千	の	親
	ヤ	で	か
	ン	あ	離
80	60	ス	り
		あ	り

問十
イ

問七
ウ

問四
イ

問八
イ

問五
エ

問九
エ

問六
ア

	I
	II
	III
	IV
	V
	VI

受験番号

氏名

小計

◆右のらんには何も書かないこと。

問		士			
と言いたかった。	い	か	し	と	百
	力	ら	い	で	井
	め	、	思	ほ	か
	た	最	い	な	急
	い	後	を	い	い
	は	く	す	か	で
	遊	ら	る	、	大
	び	い	こ	時	人
	を	一	と	に	に
	一	俺	も	は	な
緒	と	必	子	ろ	
に	、	要	ど	う	
し	、	は	も	と	
よ	勉	ろ	ら	す	
う	強	う	レ	る	
	で	と	く	の	
	ほ	い	遊	ほ	
	は	う	ん	悪	
	く	思	で	い	
	で	い	楽	？	

問 一	
d	a
自	推
卑	理
e	b
補	一
足	因
	c
	以
	降

問 五
ウ

問 三
了

問 三
工

問 四
工

問 八
ウ

問 五
ウ

問 二
イ

問 六
工

問 三
了

問 七
イ

問 四
お
客
さん
の